

前々号から3回にわたり、「SDGs」について連載しています。最終回となる今回は、『SDGs建築ガイド日本版』の編集プロセスと事例選定の基準・視点、そして顕在化した課題について岩橋祐之氏に執筆いただきました。

『SDGs建築ガイド日本版』 編集後記と展望



JIA 国際委員会
岩橋祐之

特別委員会の事務局

SDGsが2015年9月の国連サミットで採択され、「持続可能な開発目標」として2030年までに世界が達成すべき17のゴールが掲げられました。それを受けてUIA（国際建築家連合）とデンマーク王立芸術アカデミーとデンマーク建築家協会が協働して、2018年末に『SDGs建築ガイド』を発行しました。そのイントロダクションでも書かれています。「ゴール実現に向けては世界の各地域の気候・文化・取り組みを取り入れた『新しい解決策』が必要」であり、そのためにも各国がそれぞれ「SDGs建築ガイド」を作成することの重要性を認識しなくてはなりません。日本では2019年3月末、六鹿会長が「JIA SDGs建築ガイド日本版 特別委員会」をいち早く立ち上げ、日本版の作成に着手しました。2019年4月にバングラデシュ・ダッカで行われたUIAのSDGs委員会では、岩村委員長がJIAの取り組みを説明し、各国の代表から賛同を得ました。

ダッカの委員会に参加し、一連の経緯を間近に見ながら、『SDGs建築ガイド日本版』作成の事務局を山下博満

氏とともに担当したので、その編集のプロセスと事例選定の基準と視点、その他顕在化した課題をご紹介します。また編集時に「実現できなかった取り組み」と、「今後の展開」についても少し触れさせていただきます。



『SDGs建築ガイド日本版』

事例の収集と絞り込みの過程

最初に、特別委員会の委員とJIA各支部からの推薦で、ゴールごとの課題に貢献していると考えた事例を集めて一覧表にしました。そして5月には全体で250ほどの事例がロングリストとして集まりました。この時点では複数のゴールに該当する事例があり、どのゴールに当てはめるのがふさわしいかを議論しました。どの建物も複数のゴールに当てはまるのは必然で、ゴールと1対1の関係にあるわけではないため、事例としての特徴がより分かり

やすいものを重視して選択しました。さらに、ショートリストを作る際は、所在地・規模・発注者・設計者などが偏らないようにバランスにも配慮しました。選定された建物について委員で分担して文章を作成し、伊藤公文さんに編集補佐を、牧尾晴喜さんに英訳をお願いしました。

SDGsのゴールに対応する選択の基準

国連サミットで採択された17のゴールは建築に限ったものではなく、UIAが作成した『SDGs建築ガイド』で初めて建築という視点に置き換えられた17のゴールが解説され、今回の日本版はこのUIAの解説に従って各事例をゴール別に当てはめました。この過程の事例検証では、事務局側でUIA版の原文をかなり読み込む必要がありました。UIA版の事例は、実際に建っている建物に限定されており、また「取組課題 (Challenge)」と「貢献内容 (Contribution)」という表現で建物を紹介しているため、日本版も設計者が特定でき、かつ完成している現代の建築物に限定して選択しました。

実は事例収集の過程で、委員から古い建築物も候補事例として多く寄せられたため、それは単純に除外せず、「日本のヴァナキュラーな建築文化」として本章とは別に構成することとしましたが、このヴァナキュラーな建築文化という視点が、「今後のSDGsの展開」に重要な意味を持つという発見がありました。

SDGsのゴールに対応する視点

上記の、各事例をどのゴールに対応するかという作業で浮上した課題は、これまでSDGsのゴールに対応するような視点であまり建築を評価してきていないということでした。したがって、文献や建築雑誌などをもとに優れた点を評価する場合、その評価ポイントが見えにくく、改めて建築の内容を吟味する必要がありました。幸い委員から推薦された事例は「SDGsの視点」で意識的に評価されていなくても、実際には「SDGsの視点」に当てはまる優れた点があり、改めて優れた建築物の普遍的な

価値に気づかされることになりましたが、今後は各種の賞やコンペにおける建築の評価基準も「SDGsの視点」を顕在化させていく必要があるかもしれません。特に古くからある建築の賞では、評価軸を特定せず建築界で共有されてきた価値観をもとにすることが多く、環境系の賞ではエネルギーや自然への影響が主な評価基準となる傾向があります。しかしながら、実は建築にはそれ以外の意義があることを、SDGsの17のゴールは気づかせてくれるように思います。

定性的か定量的か

UIAのSDGs運営委員会でも議論されていますが、SDGsとしては点数化やラベリングは避けようという考え方があります。これはLEED・WELL・CASBEEなど定量的評価に基づく認証制度がすでに普及していることに対して、数値の達成度や量的条件のクリア率で互いに競争するのではなく、数値だけでは測れない、経済・社会・環境にとって重要で本質的な問題を発見し、意味ある建築環境をつくろうという考え方からきていると思われまます。これは点数稼ぎのテクニックの罠に陥ったり、特定の産業や企業の利害と結びついたりすることを避けるなど、認証制度への反省もあるのかもしれません。

コレクションではなくガイド

UIAのSDGs運営委員会ですらに議論されている事柄として、建築年鑑や選集など建築作品のコレクションは避けるという、各国の建築家協会が現在行っていることとの重複を避けるべきとの意見もあります。ラベリングとコレクションの2つは、共に競争心理という人間の本能(ある意味での弱点)に通ずる概念で、コレクションもやはりSDGsの精神から逸脱する流れを生む可能性があると考えられます。今回の建築ガイドもその名の通り「ガイド」であり、ゴールの趣旨をより具体例を示して理解しやすくした「バイブル」のような存在であると考えます。今後の第2版、3版が編集されることになる場合は気を付けるべき点だと思われまます。

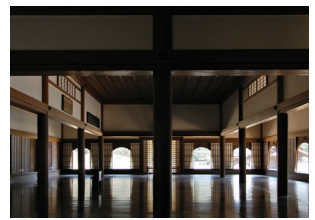
日本のヴァナキュラーな建築文化

UIA版ガイドブックに対して、日本版を検討する過程で、UIAの事例収集の基準に従い、委員から推薦された日本各地の地域風土に根差したヴァナキュラーな建築、建築家不在のアノニマスな建築、近代以前の歴史的建築を「日本のヴァナキュラーな建築文化」として、本章とは別に構成しました。

(日本のヴァナキュラーな建築文化の例)



大内宿の茅葺屋根



特別史跡旧閑谷学校



嚴島神社



伊根の舟屋

SDGsの視点に立つと、近代化以前の工業化社会を参照することがありますが、世界地図的に見ると、各国の違いはその地勢・気候・風習・産業などから生まれていると考えられます。近代以前から日本の社会に生き続けている有形・無形の「要素」を再発見し、国内のみならず他国に対しても発信することで、UIA版『SDGs建築ガイド』のイントロダクションでも書かれている「ゴール実現に向けては世界の各地域の気候・文化・取り組みを取り入れた『新しい解決策』が必要」ということに対して応えることになると考えます。さらに他国におけるヴァナキュラーな建築文化が、世界共通の「新しい解決策」として日本に対しても応用のできる可能性も秘めています。

今後の展開：ワークショップ

日本のヴァナキュラーな建築文化の文脈から浮かび上がる、SDGsに貢献し得る有形・無形の「建築的要素」を抽出して、今回のガイドブックに17のゴールとは異なる側面の視点を与えようと試みましたが、残念ながら時間切れとなってしまい、「日本のヴァナキュラーな建築文化」として山下博満氏が文章を執筆されました。

現在、ヴァナキュラーな建築文化の提案や、試験的な伝統的要素の抽出作業に協力いただいた東京都市大学福島加津也研究室のOB・現役学生と共に作業を再開し、今後開かれるUIA大会へ向けた展示と発表のためにワークショップを始めました。経済・社会・環境のうち、環境的側面の強い「建築的要素」である、庇・すだれ・縁側・炬燵などは省エネルギーに加え社会的側面もあります。また、屋台・花火・祭りのような社会的要素から、モジュールや規格寸法のような経済や産業と結びついたものまで、多彩な「建築的要素」が現代の建築に生き続けていることを再発見しようと試みています。